

## 要介護高齢者におけるICF「活動」と「環境因子」の関係 Relationship between their activities and environmental factors for elderly requiring nursing care

○能登真一 (OT), 泉 良太 (OT), 岩波 潤 (OT)

新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科

Key words: ICF, 高齢者, 共分散構造分析

【背景と目的】高齢化の進展により、医療サービスと介護サービスの一体的な提供が求められている。中でもリハビリテーション職と看護師や介護士との連携の重要性が指摘されているが、その際に欠かせないのが多職種間で使用する共通言語である。最有力の候補はICFであるが、その普及は十分とは言えない。その原因の一つにICFの項目数の多さや評価尺度としてのあいまいさが指摘されている。またICFの構成要素である「活動」や「参加」、「環境因子」など構成要素間の関係も十分に明らかにされていないわけではない。本研究では、要介護高齢者に対して用いたICFの評価結果を基に、「活動」と「環境因子」についてそれぞれの構造を調べた上で、両者がどのような関係を有するかについて共分散構造分析によって確かめた。

【方法】平成20年から21年にかけて実施した要介護高齢者に対するICFの評価研究の結果を使用した。対象者は全国7府県18の介護保険施設に入所あるいは通所、訪問により作業療法サービスを利用している353名、平均年齢は80.7才で、男性133名、女性220名であった。要介護度は要支援1から要介護5までそれぞれ、3名、12名、49名、82名、101名、70名、36名であった。ICFには「活動」や「参加」などの構成要素があり、その下位項目として、1桁レベルの領域、さらにその下に2桁レベル、3桁レベルのコードがある。今回の調査ではICFの2桁レベルのコードについて厚生労働省が示す評価点基準を基に0～4までの5段階で評価した。つまり、「活動」ではその困難度を、「環境因子」では影響の程度を示すものとなる。解析ではまず、その2桁レベルのコードについて1桁レベルの領域ごとに主成分分析を行い「活動」および「環境因子」の構造を確認した後に、そこで算出された第1主成分を用いて共分散構造分析を実施した。なお、「環境因子」は阻害因子と促進因子に分けて検討した。統計解析のためのソフトはAmos16.0を用いた。なお、対象者には研究の目的と個人情報管理の方法などを説明した上で書面により同意を得ている。

【結果】「活動」では「学習と知識（標準化推定値：0.89）」、「課題と知識（0.92）」、「コミュニケーション（0.93）」、「対人関係（0.90）」が高い影響を示したのに対し、「運動（0.63）」、「家庭（0.49）」、「生活場面（0.53）」などがそれらよりも低い影響にとどまった。「環境因子」の阻害因子に関しては、「生產品（0.93）」、「サービス（0.94）」が高くなり、促進因子としても「生產品（1.09）」が高くなった。また、「活動」と「環境因子」の相関関係については、阻害因子との相関が-0.18と低くなったのに対して、促進因子と相関が-0.43と強くなった。

【考察】今回用いた統計手法は共分散構造分析の中の確認的因子分析にあたる。「活動」と阻害、促進の各「環境因子」の背後にある因子構造を調べる手法である。今回の結果から、高齢者の「活動」の困難度には「環境因子」の中の阻害因子よりも促進因子の方が強く影響していることが確認された。それとともに、促進因子の構造分析から「生產品」や「サービス」が強く影響を与えるという結果が得られていることから、高齢者の「活動」の困難度を軽減するにはこの「生產品」や「サービス」を充実させることが重要であると示唆された。